

## 追悼

---

### 稲子恒夫先生を偲ぶ

竹森 正孝

戦後のわが国のソビエト法研究の一翼を先頭に立って担ってこられた稲子恒夫先生が、一昨年(2011年)8月23日に急逝されました。名古屋大学法学部でのゼミ生のときから長いあいだ、文字通り、公私にわたるご指導を受けてきただけに、突然の訃報に接し、痛恨の極みです。前年末に体調を崩され、手術も受けられるなどしたあとも、比較のお元気そうな様子を写真で拝見していただくに、ほんとうに驚きました。直接的には、虚血性心疾患という病名でしたが、十年ほどまえに患われた脳梗塞、近年の消化器系疾患などにより体力的にもかなりの負担を強いられていたのだと思います。

先生は、1927年2月7日、東京に生まれ、多感な青少年時代を戦争の最中に過ごされ、戦後再開した大学に進まれ、48年3月、東京大学法学部を卒業されています。ときどき、中学校時代の同窓生名簿を出され、名前はあっても、その他の記述欄が白紙になっている箇所(膨大な量にのぼる)を示され、どうしてかわかりますか?と聞かれることがありました。1945年3月の東京大空襲のため、生死を含め、消息がわからなくなってしまったためですが、繰り返しそのことを問われたのは、先生自らがこの事実と戦争の理不尽さを何度も確認されるために話題にされたのだと思います。先生の平和や人権・民主主義にたいする熱く変わらぬ姿勢は、この若い時代の体験にも基づくものであったことは間違いのないでしょう。

卒業後、1年あまり民間企業に勤務されますが、山之内一郎先生の推挙もあって、49年8月から北海道大学法文学部助手になられ、翌50年8月からはその後の研究拠点とされる名古屋大学法学部に移られ、90年3月の停年退職まで当学部で、研究に、そして教育に携わられることとなります。社会主義法研究の重要な拠点として、旺盛な研究活動を続けられるとともに、研究者養成にも力を入れられたことは、つとに知られているとおりです。その間、75年秋から1年間、モスクワでの在外研究に赴かれますが、40代後半になってからの在外研究は、ソビエト法研究者としてはかなり遅いものであったように思われます。この間、比較法学会の理事や日本学術会議会員などもつとめられ、学界においても大きな役割を果たしてこられたことは周知のとおりです。退職後は、自宅の書斎を文字通り根城にして、ものすごい量の新たな情報の入手と分析をつうじて、当時の激動するソ連とその崩壊後のロシアの法と法学の動向をフォローする仕事に集中されてきました。この晩年の仕事の集大成が、『政治法律ロシア語辞典』(ナウカ、1992年)であり、『ロシアの20世紀 年表・資料・分析』(東洋書店、2007年、以下『ロシアの20世紀』と略記)であ

ることは、改めて確認するまでもないかと思われます。

先生は、若い時代から旺盛にソビエト法研究に取り組まれ、生涯をつうじてその第一線を担い、既成の考えに捉われない、常に新しい、かつ自由闊達な発想でソ連社会主義と向き合ってきました。論争的な内容を含むものではありませんが、「社会主義的適法性」を西欧法思想の「法の支配」との関連で論じられ、長谷川正安教授とともに初期ソビエト法研究にみられた「輸入法学」的傾向に警鐘をならされ、ユーゴスラビアを社会主義圏に加えない風潮のあった時代に、いち早く、ユーゴスラビア法を社会主義法のバリエーションとみなし、また、中国（法）批判に腰が引けていたわが国の研究状況を批判し、正面から中国（法）批判を展開されてきました。

先生の研究の特徴をひとことでどう表現するかは、なかなかむずかしい問題ですが、大江泰一郎、小森田秋夫の両氏は、いみじくも口をそろえて、キーワードは「情報」だといわれたことがあります。卓見だといわなければなりません。私は、先にふれたように、新しい事実、新しい事態に、自らのそれをも含む既製の概念に拘泥されない、変化や転換が起こるにはそれなりの根拠があることを直視し、その過程を緻密にフォローする、そんな姿勢が基本にあるのではないかと感じてきました。歴史的事象の評価の見直しが求められたとき、先生にとっても恐らくは必要であったであろう方法的反省や研究の総括が、新たな事態における新しい研究成果にどう反映したかは、その成果自体の読み手に委ねるという姿勢もほぼ一貫したものだのように思います。1990年代に10年近く月刊で刊行された情報誌『社会主義法のうごき』には、毎号のように、先生からの「情報」提供がありました。100号まで継続できたのも、先生の支えがあったからこそということもありますが、その当時から集めておられた情報（資料、データ）が、最後の遺作となった『ロシアの20世紀』に生かされることとなります。

こうした研究方法は、その『ロシアの20世紀』のなかの一文によく現されています。すこし長くなりますが、確認しておきましょう。

「ソ連国外の文献はソ連の文献にない事実をあげていたが、これらは断片的で体系的ではなかった。そのため20世紀のロシアを総合的に知ることはむずかしかった。／（原文改行）時代は変わった。ソ連末期の改革派の新聞雑誌や本は、隠され、忘れられていた事件と人物を語りはじめ、スターリン時代以後の多くのことを明らかにした。しかしレーニ時代はまだ霧につつまれていた。秘密の箱が開かれたのは、1991年のクーデターの失敗後に、ソ連共産党中央委員会とソ連国家保安委員会（KGB、カゲベ）保存の極秘文書が、ロシア連邦大統領府の文書館に移されてからである。1992年からロシアの新聞雑誌や本は、レーニン時代をふくむ、隠されていた文書をつぎつぎと載せ、1990年代半ばからは極秘文書を集めた資料集が多数出ており。極秘文書を使った研究の発表がつづいている」（3－4頁）。（引用文の表記は、本誌の編集方針に統一するため、一部変えてある。以下、同）

「この年表は、これらの資料を利用したので、20世紀のロシアについて膨大な数の生きた事実を記すことができた。20世紀ロシアの情報の公開はまだつづくから、これからまだまだ多くの事実が判明するだろう。／しかし文書の保存は完全ではなかった。1917年の二月革命のとき、怒った群衆が警察を襲撃して文書をばらまき、焼いてしまった。そのため革命前の犯罪の記録や、秘密警察が革命政党内に送り込んだスパイ関係の文書がなくなった。十月革命後も文書の破棄がくりか

えし行われた。革命直後には登記簿や会社の書類、株式、債権、裁判所、金融機関の書類が破棄され、枯紙として再生された。…このため革命前の文書だけでなく、ソビエト時代の多くの文書、とくに党の最高幹部が直接に関係した文書が破棄された。それでも膨大な数の文書が『秘』、『極秘』として残っていたから、これらの公開により20世紀ロシアのわれわれの知識は数千倍も豊かになった。」(4-5頁)

この本の主たる部分はもちろん年表にあります。新しい情報を駆使しての本書の魅力は、それはすなわち稲子法学の魅力にもつながるものでもあるのですが、ほぼ年ごとに挿入され、長い場合には10頁にもわたっている「コラム」(全部で77箇所を上り、取り上げられている事項は数百に及ぶ)です。

先生もこの本の「あとがき」(13頁にも及ぶ)で触れられているように、「このような大作業を一人するのは無理だし、隠されていた事実の公表はまだつづいており、ロシアと各国で新しい資料を使った研究が次々と発表されているから、もれている事実があるだろうし、しかも筆者は途中で脳梗塞になり、認知症予防のために病床で仕事をした。さいわい大事にいたらなかったが、足腰が弱いのに大量の資料の山から必要な本を探し出し、持ち歩くのに苦勞した。図書館にも行けなくなった。健康だったら、シベリア出兵や関東軍と『満州国』関係のもっとくわしいデータを調べられたらう」(999頁)だけに、心残りもあったかと思われま。この本を上梓されて以降、執筆のご苦勞も影響したかと思いますが、やはりご自身の体力だけでなく、気力も次第に減退していったのは、ほんとうに残念なことでした。

最後に、先生の主要著作を何点かあげるとすれば、別のところでも紹介させていただきましたが、私は、まず、バシュカーニス『マルクス主義と法の一般理論』(訳書、日本評論社、1958年)と、先にあげた『政治法律ロシア語辞典』、『ロシアの20世紀』をあげたいと思います。また、『ソビエト法入門』(法律文化社、1965年)は、ちょうど戦後生まれの社会主義法研究者のソ連の政治や法に関心をもつきっかけを与えた大事な業績です。そして、わが国の中国法研究に大きな一石を投じた『現代中国の法と政治』(日中出版、1975年)も忘れられません。これらの諸著作は、今も生き生きとその生命力を維持しています。

長きにわたって、わが国の社会主義法研究、ソビエト法研究を引っ張ってこられ、すぐれた業績を残された先生の遺志やエネルギーを引き継げるか、心もとないのですが、いつも穏やかに、かつフランクに接していただいたお人柄を偲びつつ、本文を結びたいと思います。大学教員の職をえて自立への一歩を歩み始めた私に、留学先のモスクワから「これからはライバルですね」と励ましていただいたときのことも忘れられない思い出です。

先生の業績もまた、その方法的態度やソ連社会主義のそれぞれの時期の評価などをふくめ、批判的な検討の俎上にのぼることになるでしょうが、そうした作業をつうじて、わが国の社会主義法研究、ロシア法や中国法の研究が、新たな高みを迎えることができることを、先生ご自身が何よりも願っておられることと思います。いつも気にかけておられた本研究会(社会主義法研究会の時代を含め)が、継承した課題は大きいといわなければなりません。